

真田図書館サポーターだより 第23号

一年を振り返って

令和8年5月23日発行

真田図書館サポーターの会 会長 若林雅一



コロナ禍から数年が経ち、多くの会員が参加しての総会開催が当たり前になり、各々が自信を持って意見を出し合い、サポート活動に勤しんでもらったことをうれしく感じているところです。会員の皆さん個々の活動の積み重ねから活動内容も日々向上が図られ、サポーターの会が活性化して、誠に心強く感謝の一年となりました。

計画された事業は、つつがなく実行することができました。図書館玄関前庭の環境美化活動も、図書館利用者が気持ち良く来館いただけるようにと、心を込めて暑い日にも草退治を行いました。庭にはすばらしい花が咲き誇っていますが、玄関口に開花時期が長く赤が鮮やかなサルビアのプランターを並べ、図書館脇には黄色が鮮やかなマリーゴールドも植えることができました。「来館する人々に季節を楽しむことができるような花木の植栽」として内容充実も行いたいと考えようになりました。

恒例の図書館コンサートは、音楽に造詣が深い会員の尽力により、「小出岳悠ヴァイオリンコンサート」を2年続けて行なうことができ、「お帰りなさい、ただいま」と奏者と来館者の心が一体となり、会場からは演奏者に“ブラボー”などの賛美の声が大きく響き渡るなど大変喜ばしい情景となりました。

本の整理につきましても、ボランティア研修等で専門性を学び更に技術の向上を図りながら活動し、協力する会員も増えつつあり、大変ありがたいことであります。また、業務部会長の発案で5月17日に食事会を行い、多数の会員が参加し、楽しく懇談することができました。

1年間、本当にありがとうございました。



真田図書館コンサートに寄せて

村越 仁美

ヴァイオリンの音色が真田図書館に響き渡る秋の夜長

今年も小出岳悠さんと深沢雅美さんによるヴァイオリンコンサートが開かれました。

一段と成長した岳悠さんの演奏は、一つ一つの音色にふるさとを思い出される音がちりばめられていました。サブタイトル「真田の郷 思い出はいつもやさしい」のように真田丸のメインテーマ曲は大河ドラマで上田市の市民が胸をおどらせながら毎週見っていた日々を思



い出させてくれました。また、生誕150年のクライスラーの曲中国の太鼓はヴァイオリンで弾いているにも関わらず二胡で弾いているように聞こえ、中華料理がテーブルに並びとても楽しそうに食事をしている情景が浮かんできました。

今回のコンサートも私にとって思い出の

1ページになったことを感謝します。また、素晴らしいコンサートを企画して下さった真田図書館の皆様ありがとうございました。これからもこのような企画がずっと続きますよう願っております。

『夏の夜空を彩る花火について』

講師：上原 文明 氏(武舎煙火工業株式会社) 5月17日(土)(12名参加)

通常、『真田まつり』のときに打ち上げあげられる花火玉は5号玉とのことでしたが、会場では様々な大きさの花火玉が並べられて講義の合間には盛んに受講者が質問をしていました。

また、花火の製造工程をビデオで視聴しました。

真田図書館 次長 菊地 正志



【上原文明先生】



『バラとガーデニング《花からの贈り物 その秘めたる力》』

講師：大平 喜代子 氏 (信州国際音楽村公園バラの会チーフアドバイザー)

10月4日(土)(40名参加)

真田塾での植物栽培に関するテーマは、かつて7年前まで非常に人気を博していた「家庭菜園講座」以来である。今回は、音楽村バラ園での10年間にわたる活動のリーダーを講師に迎え定員いっぱいの講座となった。東京と比較して寒冷的な上田真田での剪定の適期をはじめとする経験に基づく栽培法の話には関心が尽きないようで、塾終了後も熱心な聴講生から質問が続いていた。

完璧な手入れはできなくともそれなりの目標をもって楽しめばいいのではないかと講師の方からの含蓄のある提案をいただきました。

真田図書館サポーター 荒木 浩二郎



『文化から眺める江戸時代』

講師：両角 文秋 氏(信州大学人文学部・上田高校非常勤講師)

第1回：12月20日(土)

「元禄期の文化（井原西鶴・近松門左衛門・松尾芭蕉）
を中心に」（26名参加）

第2回：1月24日(土)

「宝暦・天明期の文化（葛屋重三郎をとりまく人々）
を中心に」（16名参加）

草双紙、洒落本、瓦版、浮世絵などの江戸時代の出版物が、印刷技術の普及で多くの人にゆき渡り、小林一茶・雷伝為右衛門といった信州にゆかりがある人達の存在でより一層親しみを持って、庶民に受け入れられたとの話がありました。

また32日間かけて行ったという旧横沢村の伊勢講の様子を「真田町誌」から引用され、幾筋もの街道が通る信州を多くの浪人、旅人、行商、僧など人々が盛んに往来したことを聞きました。

真田図書館サポーター 倉島 とよ子



【両角文秋先生】

『バラとガーデニング』講座の様子



【大平喜代子先生】



第15回図書館まつり

本のリサイクル市・スペシャルおはなし広場

○本のリサイクル市 (来場者178名)

事前に多くの方に提供をいただいた本のうち、1,494冊程の本をお持ち帰りいただきました。会場は多くの人でにぎわいました。

図書館まつりに先立ち本の提供を受けました

★ 当日は大盛況でした！😊

お帰りのお土産も用意しました



○スペシャルおはなし広場

午前の部 ① 滝沢・舞沢・宮坂さん (腹話術ショー)

② 焼酎亭呑み鉄さん

午後の部 ③ 鳴沢今日子さん (折り紙教室)

④ 長野大学 お話し支援プロジェクトの皆さん (絵本の読み聞かせ)

会場にたくさんの子供たちの歓声と笑い声が響きました。拍手喝采のうちイベントは終了しました。

腹話術をしてくれた
滝沢・舞沢・宮坂さん



長野大学 お話し支援プロジェクトの
皆さんによる読み聞かせ



焼酎亭呑み鉄さん



新やまびこ号 参上



折り紙教室は親子連れに好評



真田図書館ボランティア講座

ボランティア講座「図書館でのおはなし会を楽しんでもらうために」に参加して

真田図書館サポーターの会 内田 元子

講師はざしきわらしの山浦美幸さん。先生の明るく元気の良い講座を受けて、今後の活動の参考にさせていただきたいと参加しました。

私たちの活動はこのままで良いのか？問題点は何か？その原因は？などについて考え、活動する人も参加する人も減ってきている現状や、子どもたちの育つ環境の変化を認識することが必要であり、自分たちの活動目的をはっきりさせ、譲れないことを真ん中に置くことが重要であるとの話がありました。



一冊の絵本を読んでくださり、読み方を色々変えて、その違いを分かりやすく説明されたことも、面白い発見でした。

現在、真田図書館のおはなし広場には7つの団体が属しています。このことは利用者の選択肢が増えるということであり、自分たちの色を出しても他団体とも共存できるため、他と比べなくても良くて、たくさん人が集まることだけがプラスとは限らないとの話を聞きました。

私たちの活動目的には、“動画”に慣れている子どもたちに本でしか楽しめないことを知ってほしい、“物語”を聞く楽しさを知る子どもになってほしい、という思いがあるので、これからも目的に向かって続けていきたいと思いました。

な
た
ち
の
こ
の
地
域
の
ミ
ミ
ール
の
会
』
さ
ん
に
す
て
ま
い
『
と
の
中
』
の
た
し
を
ま
し
な
ど
す
き
は
な
ま
だ
『
お
歌
り
た
い
』
は
劇
団
で
は
朗
読
を
寄
せ
て
居
る
芝
居
団
一
月
紙
芝
居
メ
ン
バ
ー
に
出
演
し
て
く
だ
さ
い

お話広場と真田の民話

真田図書館サポーターの会 三井厚子（ミミールの会）

私は、真田の民話の読み聞かせや、民話の紙芝居上演などを中心にお話ボランティア活動をしています。

お母さんと手を繋いで図書館を訪れる小さなお子さんを見ていると、ふと自分の子育て時代を思い出す事がありますが、「真田の民話」もまさにその頃に制作された本です。民話の会はずいぶんと古い歴史のある会で、故鈴木優先生のご指導の下、メンバーの皆さんが子どもを連れて集まりました。私もおんぶして連れて行ったことを思い出します。時には



子どもを連れて、赤井の七つ石や千古の滝、石割の梨などを巡りどんなに楽しかったことでしょう。今では山も深く、なかなか近づけない場所も多いのですが大切な思い出です。

人々の生活が時代とともに変わるなか、民話は少し時代に合っていないこともあるでしょう。まして今は、たくさんの素敵なお話が製作され出版されています。しかしながらだからこそ、素朴で不変な何かを訴えている何かが心に響くのかなあ・・・とも思います。

不思議なことに、「むかし、むかし・・・」で始まるお話は、大人も子どもも心がわくわくします。そのようなお話が出来ることに感謝をして、お話ボランティア活動をさせていただいています。

読書はいつでも、どこでも

図書館サポーター 林 良

本は一度きりの人生を豊かにしてくれる。様々な人たちと出会える世界だ。

司馬遼太郎さんが著した”空海の風景“（中央公論社刊）を読んだ感想の一部でも伝えたい。奈良時代末期から平安時代初頭にかけて歴史の舞台に登場した最澄 空海が全身全霊の祈りの中で、終焉を迎えようとしていた唐に向かった遣唐使船の記録がそこにある。咽かえるほどの風、ぬめり、においと褪せることの無い光、色彩といったものが散りばめられている。

当時、唐の庶民は、まだ日本という国名を知らず、むしろ倭国という地域名しか知らなかった。遣唐使の四隻は九州の田ノ浦を出港した。1 隻目には留学生である空海が、2 隻目には天皇、皇太子、



そして藤原氏の後援する最澄が乗船した。しかしながら、空海は正式な随員ではないため、自前ですべてを調達せねばならなかった。そのしんどさが作中見事に描写されていた。遣唐使船はボートに毛が生えた程度のもので、死の不安が舟板一枚を隔てて船のなかをドロドロに浸しこんでいた。何度かの嵐にも遭遇し東シナ海に 34 日も漂流し、無事に大陸に到着したが、罪人の扱いをうけてしまう。 様々なハードルを飛び越え 23 人の日本人が長安に向かう許可を得たが、流れついた場所から目指す長安までは 7,500 里（およそ 30,000 km）という気の遠くなるような旅が待ち受けていた。これでもか、これでもか、と大きな壁が待ち受けていた。



私はほとんど毎晩 10 時頃から 12 時の間は本を読んでいるがこの本を読んでいるときはいつも正座をしている。誰もがきつと怖いもの見たさのような気持ちは持っていると思うが、やはり怖い。

読書はいい、パスポートもいらないしビザ（査証）の心配もいらない。円安であろうとなかろうと関係ない。視聴率を気にする必要もなく、お気に入りの役者を好きなように仕立て、想像の世界の中、少し背中を丸めて歩んでいる自分がそこにいる。長安をめざしてぼろぼろの藁草履をはいて歩いている。

サポーターの皆さんとともに築く真田図書館の魅力

真田図書館 司書 関 真由子

真田図書館で働くようになって、早くも2年が過ぎました。

初年度からサポーターの皆さんと関わらせていただいておりますが、その活動が多岐に渡っていることにとても驚きました。

特に催事は、皆さんのご協力があるからこそ成り立っていると言っても過言ではありません。

毎月1回開催している「おはなし広場」では、子どもや保護者のために、面白おかしく絵本の読み聞かせなどをしていただき、毎回とても盛り上がっています。

11月頃に開催する「図書館コンサート」では、会場設営が非常に大変です。机や展示物を移動し、演者の方の舞台を設置し、観客用の椅子を並べる。これらの作業はとても手間がかかりますが、毎回サポーターの皆さんにお手伝いいただき、大変助かっています。

また、最大の催事である「図書館まつり」では、さまざまな面でサポートをいただいています。特に「本のリユース市」では、準備から片付けまでを中心に、さらに来場者へのお土産まで手配してくださり、毎年ご好評をいただいております。

催事だけでなく普段の活動でもお力添えをいただいています。返却本の配架は、職員が目の中の他の業務に追われがちで、後回しになりがちです。そのようなとき、皆さんの配架後の空になったブックトラックを見ると、いつも「助かった！」という気持ちになります。



最後に、花壇の手入れ。特に夏の暑い中での作業は大変かと思っておりますが、定期的に作業をしていただいているおかげで、お客様から「きれいですね」とお褒めの言葉をいただくことがあります。

改めて振り返ると、やはり「サポーターの皆さんあってこそ真田図書館だ」という思いを強く抱きます。これからも変わらぬご協力をお願いいたします。